

だんだだんだん　だんだだん、かわア　掘ってりや　りゃゝ
だんだだんだん　だんだだん、やつら見てるよ　見られても

だんだだんだん　だんだだん、いくら掘っても石だがねつつて

だんだだんだん　だんだだん、おとつあんの　石頭　石でなぐられて

だんだだんだん　だんだだん、びしゃって　飛んでも　川　にはならんの
よう

だんだだんだん　だんだだん、やつら見てるよ　じろりと睨んで

だんだだんだん　だんだだん、にどかえれずのお家には、かなしい子どもと

妻が待つ

だんだだんだん　だんだだん、いくら掘っても石だがね

だんだだんだん　だんだだん、

果てがないのサ

キリがないのサ

絶えないリズムに鍬のドラムス

灼熱の涸れ沢に躍る血肉と汗飛沫

歌刻む男とこの手足は陽光に滅びはじめる

どこにもないのサ

果てがないのサ

監視の視線は命の奥まで行き届き

やつらどこか遠い場所から来たくせに

瞬きもせずこちらを見ている

夏がどれだけ暑かったとしても、ウイグル帽子の下には白い布を付けるんですよ。きつとびしょびしょに汗が染みこんだでしょうね。その地域の何十人、何百人と同じ川を掘ったんです。お昼にはきつと奥さんが来て、エッケンチヤイとナンを持ってきて応援しに来てくれたのでしょうか。わたしの想像ですけれどもねとサリナさんが立ち上がって空の鍬をふるう。どすつと鈍い音が聞こえる気がする。どすつ　どすつ　どどすつ　どどすつ　どどすつ　サリナさんの目には見えている、わたしの目にも見えている。飛び散る汗、真上に上がる太陽、振り返ると腕組みをして睨みつけてくる監視員、一瞬だけそよぐ風、